

## 本文

Q-1. (6) cansado と agotado はどのように違いますか？ 疲れ方の度合いで使い分けたりするのですか？

A-1. cansado は「疲れている、疲労している」という意味ですが、agotado は「エネルギーが尽きている、疲労困憊している」という意味で、さらに強い疲労感があります。

Q-2. (9) 主語は pasear と contemplar の両方なのかどうかわからなかった。述語はそうすると era か eran か...とかも疑問だった。

A-2. era の主語は pasear...と、そして付け加えて、contemplar...です。不定詞が主語となって動詞の後に来るときには、それが...y...という形で2 つ以上でもよく単数になります。また、この文のように、付加的に累加するときは必ず単数になります。

Q-3. (9) contemplar, mirar, ver の違いが分かりません。

A-3. contemplar は「(静かに・じっと・考えながら)眺める」、mirar は「(視線を向けて)注視する」、ver 「見る、見える、視界に入ってくる」という意味です。

Q-4. (10) ir de viaje と viajar の違いは？

A-4. 「旅行に行く」と「旅行する」のような違いです。ほとんど同じ意味です。

Q-5. (12) A mí ... me の構文を説明してください。

A-5. この文は El curso de español no me deja tiempo para nada. という文の中にある me を a mí という形で文頭に取り出したものです。このように動詞に密着した代名詞は a + 代名詞の形になると動詞から離すことができ、この場合のように話題として取り出すことができます。「私と言え、...」という感じです。A mí me gusta...も同じ構造です。

Q-6. (13, 14) はなんだか矛盾しているみたい。なぜなら 13 では「よろしく」と伝えて、と言っているのに、14 ではその彼女の悪口を言っているからだ。

A-6. 14 は確かに悪口のようにも見えますが、むしろ「手紙がほしい」という気持ちがあるので、エルピラへの好意が感じられます。

## 文法

## 1. 点過去・不規則変化

Q-1. 不規則動詞を点過去にする場合は、規則動詞と同じ要領で語尾を変えるだけでよいのですか？

A-1. 規則変化と不規則変化は時制ごとに変わります。たとえば現在形で不規則の動詞でも線過去で規則変化になることもあるし、現在形で規則変化でも点過去で不規則になることもあります。時制ごとにチェックしましょう。ただし、後で習うように未来と過去未来、点過去と接続法過去などは連動します。

Q-2. 線過去の不規則は3つだけなのに点過去はたくさんある。アンバランスな感じがする。

A-2. 確かにアンバランスです。スペイン語の活用形は一般にとっても規則的ですが、点過去は他とかなり違います。これは点過去が他の動詞体系とは別に位置する特別な時制だからです。

Q-3. 活用が多すぎる。なぜ点過去は線過去や現在形に比べて複雑な活用の仕方をするのだろう。英語では go, have などよく使う動詞が不規則な活用をしたりするが。

A-3. 確かに、英語に比べてスペイン語は活用形が多いようですが、それでもとても整理された規則的な変化をします。不規則変化の中にも、一定の規則がありますから、そこを見失わないようにしましょう。点過去はとくに不規則ですが、これは時制体系の中で点過去だけが他の時制から独立した位置にあるためです。「過去に済んでしまったこと」を特別にとらえているのです。

Q-4. Recibimos cartas tuyas, mientras viajábamos. のように1つの文の中に点過去と線過去が出てくることがある。何かをやっている時（線で表す）に、何か起きた場合（点で表す）という時間の長さに注目した。

A-4. とてもよい観察です！

Q-5. 点過去不規則形はなぜ起こってしまったのだろうか？

A-5. 強変化動詞はラテン語の時代からすでに不規則でした。母音変化動詞はラテン語からスペイン語に変わるときに音韻変化があったために、不規則になりました。

Q-6. 現在、点過去の不規則変化の数はやたら多いのに、線過去の不規則変化があまり発達していないのには何か文化的な理由があるのでしょうか？

A-6. たしかに、点過去の不規則変化がたくさんあるのに、線過去は ser, ir, ver だけです。ser の線過去はラテン語時代から eram, eras, erat... というように不規則だったのですが、ir は規則的に ibam, ibas, ibat となっていました。これが規則的だというのは、ラテン語です

すべての動詞に ba がついていたからです。それが、スペイン語の時代になって、er 動詞と ir 動詞は eba, iba > ía となったので、懸命にがんばって形を残した iba は、気づいてみると周りの動詞がすべて ía となってしまっていたので、自分だけが不規則動詞のレッテルを貼られてしまうことになりました。ver もラテン語では videre、そして中世スペイン語では veer だったので、線過去は問題なく（規則的に）veía が使われていました。ところが、ee は他の活用形で e と単純化されたので、これも不規則扱いになってしまったのです。自分は正しいと思っていたのに他のものたちと違っていたため、「君は違うぞ！」と呼ばれているような感じです。さて、合衆国（古いスペイン語が残っている地域があります）やラテンアメリカ諸国での調査から、traiba (< traer) とか、oiba (<oir)が使われていることが知られています。

**Q-7.** スペイン語は動詞にいろいろな要素を集約しているような気がするのですが 不規則変化の数はヨーロッパ言語の中で多いほうなのでしょうか？

**A-7.** スペイン語は動詞にいろいろな要素を集約している、ということは確かにその通りだと思います。スペイン語の動詞のように1つの形に法、時制、主語の人称、数を集約しています。このように変化するタイプの言語を「屈折型」といいます。ヨーロッパ語には屈折型が多いのですが、その中でもラテン系の言語（ロマンス諸語といえます）の動詞は多く屈折します。一方、英語はあまり屈折することはなく、主語の人称、数は代名詞にして外側に出していますね。逆に、スラブ系のロシア語では動詞だけでなく名詞も屈折します（格変化）。日本語は、後ろにどんどん助動詞をくっつけていくタイプです（膠着型）。それから、ぜんぜん変化しない中国語のようなタイプを「孤立型」といいます。そして、1つの語で文全体を構成するような言語もあります（たとえば、イヌイットの言語）。このように言語の類型は多様ですが、スペイン語は複雑だったラテン語の変化形式を歴史の過程で整理し、かなり単純化されました。不規則変化動詞は教科書に出てくるもの（そして、それに接頭辞がついた動詞）だけです。それ以外の圧倒的多数の動詞は全部規則変化です。語根母音変化をする動詞はかなりありますが、特殊な不規則変化は私の計算では24個（andar（点過去だけ）、asir, caber, caer, conducir, dar, decir, estar, haber, hacer, ir, oír, poder, poner, querer, saber, salir, ser, tener, traer, valer, venir, ver）とそれらに接頭辞が付いた動詞（producir, componer, mantener など）だけです。これは他のヨーロッパ諸語と比べて多いのでしょうか、それとも少ないのでしょうか。ここでは単純に私の持っている辞書の不規則表に出てくる動詞の数を以下に挙げます。スペイン語 77、ポルトガル語 81、フランス語 73、イタリア語 154、英語 277、ドイツ語 210。しかし厳密に考えるならば、不規則であるかどうかの認定方法を統一して決め、その数の数え方を統一して決めてから計算しないと難しいと思います。また、単純に「不規則」といっても、その変化の仕方がスペイン語のように非常に規則的なケースも勘案しないといけません。

ところで、あれほど複雑に見えるラテン語の不規則動詞はたった6つです！これは、1つの動詞に4つの「主要部分」principal part を認めれば、そこからすべての（複雑に見える）活用形式が導出できるからです。このように、言語の構造と記述は（さっき私がやったような）表面的な数の比較を超えた魅力を秘めています。

Q-8. スペイン語は「強調」を表すときも活用が変わると聞いたが、それはこの「強変化」とまったく別物なんですか？

A-8. 「強調」を表すときに活用が変わることはありません。強変化は不規則変化の一種で、これらの動詞はどのようなときでも点過去ではこの変化をします。そもそも「強変化」と呼ばれるのは動詞の語根に強勢があるためです。

Q-9. fui のように閉母音が続くときはどちらに強勢があるのですか？

A-9. fui の場合は"i"に強勢アクセントがあります。一般に,ui やiu のように閉母音が連続するときは、後の母音が強くなります。しかし muy のように語末がy になっている場合はu にアクセントがあります。そのために,fui は×fuy と書かれないのでしょう。fui は他の動詞のアクセントパターン comí や viví に従います。ただし,単音節なのでアクセント記号はつけません。

Q-10. 語根母音変化動詞の二型（sentir 型）と五型（perder 型）ではどこが違うのですか？（どうして別の型として区分されるのですか？）

A-10. 確かに, sentí と perdí だけを見ていると区別できませんが,不定詞でわかります。sentir 型は ir 動詞ですが,perder は er 動詞で pensar 型です。

sentir

現在：siento, sientes, siente, sentimos, ...

点過去：sentí, sentiste, s<i>ntió, ..., s<i>ntieron

perder

現在：pierdo, pierdes, pierde, perdemos, ...

点過去：perdí, perdiste, perdió, ..., perdieron

とくに点過去3人称の違いに注意してください。

Q-11. 点過去の不規則の説明で、アクセントの位置のことがよくわかりません。

A-11. 点過去ではアクセントは基本的に語尾にあります。強変化では例外的に1人称単数と3人称単数で語根にアクセントがあります。

Q-12. ser と ir は点過去の活用が同じであることにより不便なことが起こったりはしないのでしょうか？

A-12. ser は「...は...だ」という意味で、一方 ir は「...へ行く」という意味でかなり違うので、文脈や状況で区別がつかます。

Q-13.poner の点過去 puse, pusiste・・・などの s はどこからきたのでしょうか？また何故 s なのでしょうか？ よろしくお願いします。

A-13.スペイン語の動詞の活用はラテン語の活用由来します。poner は古典ラテン語の ponere から発生した単語で、またスペイン語の点過去はラテン語の完了時制に由来します。ponere の完了時制は posui, posuisti...ですが、時代を経るうちに変化し、u が前の母音に引かれて移動し pousi, pousisti...となり、それがやがて puse, pusiste...となりました。ちなみに poner とよく混同される poder はラテン語の posse に由来し、その完了時制が potui, potuisti...< pude, pudiste...と変化して現在のスペイン語の点過去のかたちになりました。

Q-14. この先知っておくべき動詞の一覧表があれば助かります。教科書では代表的な例については覚えることができますが、その他の動詞を知ることができませんし、辞書はさすがに動詞数が多すぎるように思います。

A-14. 動詞の活用タイプは教科書で取り上げたものがすべてです。スペイン語は動詞の活用が非常にシンプルなのです。それぞれのタイプに属する他の動詞は、本文などで出てきた度ごとにチェックしましょう。

Q-15. スペイン語の授業で、「時制の一致は線過去」と教わりました。確かにテキスト上の文でも、時制の一致のほとんどが線過去で書かれています。ただ、5課の本文の "Ayer supe por nuestra amiga Susana, que tu marido y tú fuisteis de viaje el mes pasado al extranjero."という文では、"que"内の"ir"が点過去 2人称複数の"fuisteis"になっていて、あれ？と思いました。時制の一致は必ずしも線過去ではないというわけですか？

A-15. 時制の一致の際には、確かに線過去を使います。しかしそれは、正確に言うと「主文の動詞が過去形になると、それに引かれて従属文の現在形が線過去になる」という意味です。たとえば、

Juan me dice que va de viaje al extranjero.が、

Juan me dijo que iba de viaje al extranjero.となるわけです。

Juan が私に言った時点から見て、外国旅行をする時点は同時か、あるいは未来のことになります（「フアンは私に、外国に旅行すると言った」）。今度は、挙げてくれた例文を見てみましょう。

Ayer supe por nuestra amiga Susana, que tu marido y tú fuisteis de viaje el mes pasado al extranjero.

ここでは、「私が知った」時点から見て、あなたの夫とあなたが外国旅行をしたのは過去に属する出来事です。時制の一致の観点から厳密に言うと、「過去の過去」ですからこういう

ときには「過去完了形」が使われるべきなのです。すなわち，  
...tu marido y tú habíais ido de viaje...となります。

しかし現実には，時制の一致はそれほど厳格に守られるものではなく，過去完了形の代わりに点過去ですましてしまうことも多いのです。要するに，問題の例文の中に現れた *fuisteis* は時制の一致による点過去ではなく，過去完了形の代用だということです。

**Q-16.** 強変化動詞は変化したのが本文に出てきても気づかないことが多く，新しい単語だと思いがち。

**A-16.** 辞書によっては，変化形も見出し語として立ててあります。いずれにしても頻度が高いので，やがて慣れると思います。

#### 「点過去の強変化形」の理由

強変化形についての質問が多いので，ここで整理して説明します。専門的な内容で，長くはなりませんが。そもそも「強変化」と呼ばれるのは動詞の語根に強勢があるためです。たとえば，*supe, supiste, supo, ...*の中で，*supe* と *supo* は *su* に強勢があるので強変化形と呼ばれます。一方，*supiste, supimos, supisteis, supieron* は *su* に強勢がなく，変化語尾に強勢があるので「弱変化形」と呼びます。点過去の規則動詞と語根母音変化はすべて「弱変化形」です。この強変化形の特徴は不定詞の語根とかなり違っていることです。

さて，この強変化形はどのようにして生まれたのでしょうか。この強変化はラテン語ですでに存在していたので，ラテン語歴史文法の研究成果を参照しなければなりません。それによるとラテン語(L)での過去形には次の4種類の形成法がありました。

- (1) 子音の重複
- (2) 語根の母音の変化
- (3) S の付加
- (4) W の付加

(1)と(2)は一部の動詞に限られますが，(3)は語幹が子音で終わる動詞に共通し，(4)は語幹が母音で終わる動詞に共通します。(1)～(4)に従ってスペイン語(Sp)の強変化動詞を分類すると次のようになります。

分類	L.不定詞	L.過去	Sp.不定詞	Sp.点過去
(1)	stare	steti	estar	estuve
(1)	dare	dedi	dar	di
(2)	facere	feci	hacer	hice
(2)	venire	veni	venir	vine
(3)	dicere	dixi	decir	dije



(3)	trahere	traxi	traer	traje
(3)	ducere	duxi	conducir	conduje
(3)	quaerere	quasi	querer	quise
(4)	habere	habui	haber	hube
(4)	posse	potui	poder	pude
(4)	sapere	sapui	saber	supe
(4)	tenere	tenui	tener	tuve
(4)	ponere	posui	poner	puse
その他	esse	fui	ser	fui
その他	ire	ii	ir	fui

(1)子音の重複と(2)母音の変化はインドヨーロッパ語(IE)に共通して古くからあった変化形です。(1) 子音の重複によって L. stare (>Sp. estar)と L.dare(>Sp. dar)の過去形として steti, dedi という形が生まれました。steti は現代スペイン語(Sp)では haber - hube と形を合わせて estuve となりました。同じことが andar anduve でも起こりました。dar も同じように子音が重複して L. dedi という形が生まれましたが 母音の間の d が失われて、Sp.では di となりました。これが、estar, andar, dar が ar 動詞なのに(後に述べますが ar 動詞と ir 動詞は弱変化、つまり規則変化になるのが普通です)、強変化である理由です。つまり子音の重複によるためです。

(2) ラテン語で過去形を作るのに語根の母音を変化させるタイプがありました。この母音の変化が hacer hice, venir vine という強変化を生みました。venire veni の語根の母音はどちらも同じように見えますが、実は venire では e が短く、veni ではそれが長かったので二つは区別されていました。

(3) 語根に S をつけて過去を作る方法はギリシャ語など IE 語族の一部に限られるので、比較的新しい方法ではないかと想定されます。前に h や k があるときは[ks]「クス」となり、文字は x で書かれます。これがスペイン語の時代になると音変化をして[x]「フ」となりました。querer の場合は s がそのまま残っています。

(4) 最後の W は他の IE 語族の言語になく、ラテン語に限られるため最新の方法だと思われず。habui, potui, sapui, ...などの-u-がその印です。この u は前にある語根の母音を閉じさせる力があつたので、点過去の語根はどれも hube, pude, supe...のように u という母音が現れています。なお ponere - posui は S が付加されたように思われますが L.ponere は pos(i)nere に由来するので、むしろ語尾の ui に注目すべきでしょう。

ところで ser は L. esse に由来しますが、その過去は L. fui であって不定詞とまったく形が異なっていました。これが Sp でも継承されていますが、一方 ir もその形を拝借することになりました。ドイツのスペイン語学者 Hanssen は、古いスペイン語で ser が「存在」の意味で使われていたので、「場所」(ser)と「方向」(ir)の概念が混同された、と説明して

いますが、私はそれだけでなく ir 動詞の形が不完全であったことが大きな原因に挙げられると思います。ir 動詞には語根の部分がありません。そのため、形の補充が必要になり、現在形でも voy, vas, va...のように、まったく違う形が使われています。これは L.vadere「川を渡る」という動詞から拝借したものです。

さて最後の W の付加による過去形の作り方は、実は canté, cantaste, cantó, ...という規則変化（弱変化）と共通なのです。たとえば、amare (>Sp.amar)は次のように変化しました。amavi, amavisti, amavit, amavimus, amavistis, amaverunt.このような L. are 動詞の語末の a は長かったので、強勢が常に活用語尾にありました。ここでとくに注意したいのは-v-という子音です。これが先に挙げた(4)の W と同じなのです。habui = habWi, amavi = amaWi と読み替えればよくわかります。違いは habui の場合は子音(b)に直接 W がついていて、amavi には母音 a を介して W が付いていることです。後者はそのために強勢が活用語尾になり、スペイン語では amé, amaste, amó, amamos, amasteis, amaron となりました。vivir の場合も同様です。

次に活用語尾について見ましょう。たとえば L. facere (>Sp. hacer) の活用は feci, fecisti, fecit, fecimus, fecistis, fecerunt でした。このように YO と ÉL はとても似ていて、ÉL の語尾の t がなくなると区別がつかなくなります。そこで amó のような規則変化の語尾 o を代用して、区別をつけることになりました。その結果、hice, hiciste, hizo, hicimos, hicisteis, hicieron となりました。

このように、スペイン語の点過去の強変化形は少し複雑な事情がありますが、結果だけを見るととても整然としていることがわかります。語根の母音が u と i に統一されていることも単なる偶然ではなく、点過去の印としての統一性が意識されたのだと思われます。ラテン語からスペイン語に継承されていく過程で、古くは vivir, creer, reír, escribir, responder など強変化をしていましたが、次第に整理されて現在残っている強変化はわずかに上にあげた動詞とその派生形だけです。これらは使用頻度が高かったので古い強変化の形式がしっかりと継承されてきたのだと思われます。スペイン語の学習のときも、すべて丸暗記せずに、形式の規則性を見つめ、よく理解してから使うことをお勧めします。

## 2. 不定詞

**Q-17.** 「...すべき」という意味で使う疑問詞 + 不定詞についてなのですが、cómo に限らずどんな疑問詞を用いてもよいのでしょうか？

**A-17.** よいです。たとえば、No sé adónde ir. 「私はどこに行けばよいかわからない」。

**Q-18.** 助動詞性をもつ動詞の後につく動詞は不定詞形になるのは英語と同じだ。英語とスペイン語はどちらが先に生まれたのですか？

**A-18.** 言語が生まれた時期を明確に定めるのは難しいのですが、最初のスペイン語の形が



文献に残っているのは 10 世紀ごろです。それから 15 世紀までが中世スペイン語、そして 16 世紀以後は近代スペイン語となります。英語は、およそ次のような時代区分になります。

古英語 Old English (OE); Anglo-Saxon 650 年頃 1100 年頃

中英語 Middle English (ME) 1100 年頃 1500 年頃

近代英語 Modern English (ModE) 1500 年頃 1900 年頃

現代英語 Present-day English 1900 年頃 現在

英語はゲルマン系の言語で、スペイン語はラテン系の言語ですが、英語にはノルマン人の征服（1066 年）があったため多くのフランス語が入りました。それらの語はスペイン語の形とよく似ています。

### 3 . 数詞 . 1001 から 100 万まで

**Q-19.** スペイン語で年号を言うときは英語のように 1919 ナインティーン、ナインティーンのように言うのですか？

**A-19.** いいえ、たとえば 1919 は mil novecientos diecinueve と言います。

**Q-20.** 1001 のとき mil uno でなんで間に y が入らないのでしょうか？ それと、たとえば 156987 であれば ciento cincuenta y seis mil novecientos ochenta y siete となるのですか？ y をつける場所がどこなのかがわかりません。

**A-20.** 123.156.987 の場合、

- 1) 三桁区切りの間(たとえば 123 millones と 156 mil と 987 の間)には何も入りません。
- 2) それぞれの三桁区切りの中では、十の位と一の位の間に y が入り、百の位と十の位の間には入りません。 それだけのルールです。

### 練習

**Q-1.** 練習 2 (1) (p.44) の vinieron a verte の a ってなんですか?? ir + a + 動詞 のような役割の a なのですか?? また、その場合、querer + 動詞 などのときは必要ないのに venir では必要な理由や、このタイプ(ir+a+動詞)のように a を必要とする動詞にはどのようなものがあるのか教えてください！

**A-1.**「移動の意味を表す動詞 + a + 不定詞」の a は「目的」を表します。Ellas vinieron a verte. 「彼女たちは君に会うために来た。」 Salí a comer. 「私は食事をするために出かけた。」 Fuimos a verla. 「私たちは彼女に会いに行った。」 この他、a が「指向」を表すこともあります。Él empezó a llorar. 「彼は泣き出した。」 Él me enseñó a bailar. 「彼は私に踊り方を教えてくれた。」 ただ ir + a + 不定詞 は、a が目的を表すことから派生して、全体で未来や意志を表すこともでき、こちらの意味の場合で使われることの方が多いです。

動詞によって、後に不定詞を従えるときにどの前置詞を使い、またどういう意味になるかが決まっていることが多いので、辞書で確かめるようにしてください。またいくつかの動詞は助動詞の働きをすることがあって、前置詞を介さないで動詞 + 不定詞の形をとることができます。poder, querer, esperar, saber, sentir などです。またスペイン語にも英語と同じように、使役動詞、知覚動詞と呼ばれるものがあり、やはり動詞 + 不定詞の形をとります。Hice venir a mi hija. 「私は娘を来させた。」 Te vi entrar en la casa. 「私はあなたが家の中に入るのを見た。」

その他

**Q-1.** 1. 僕がスペイン語を選択したわけの一つに、スペインの建築物、美術品、音楽観などについて興味があったということが挙げられます。スペインをはじめ諸外国の文化についてより詳しく知りたかったり、どこを訪ねればよいかなど、そういうことを調べるノウハウを教えてください。

2. 上で述べたように建築には非常に興味があります。建築家の中でもガウディはまさに独創的な存在だと言えますが、なぜ彼はあれほどに異質な存在たり得たのでしょうか？ どのような back ground があったのか知りたいです。

**A-1.** 1. スペイン語圏の文化に関する情報の調べ方について。まず、簡単にできることはインターネットの検索ページで調べてみることです。せっかくスペイン語を習っているのですから Antonio Gaudí もしくは Antoni Gaudí と入れて、スペイン語のページを検索してみてください。まだ全部の意味がわからなくともときどき知っている単語も出てくるでしょうし、内容に興味があれば、辞書片手になんとなく意味がとれるものです。

しかし結局のところ、ネット情報は信頼性の低い、あてにならない情報が多い。大学生のあいだに身につけるべき技術は、印刷された文献を調べる技術です。そこで、国立情報学研究所 <http://webcat.nii.ac.jp/> の大学・研究機関図書館総合目録データベース (WEBCAT) を検索してみてください。タイトルワードに「ガウディ」と入れれば、提携している国公立大学の図書館に所蔵されている、「ガウディ」という語を含む本が全部ヒットします。100点近くあるはずですが、これらの本は、大学教員が研究・教育の目的のために買い揃えた本ですから、ある意味で「厳選」されているといえます。このなかからあなたが何かを感じずるタイトルの本を選んで読んでみてください。東大になれば他大学の図書館から有料でとりよせることもできます。現行図書であれば、リクエストすることによって駒場の図書館に配備してもらうこともできます。

ちなみにガウディに関して私がお薦めするのは次の2点です。

細江英公『ガウディの宇宙』集英社, 1992

鈴木豊『アントニオ ガウディ フォト・クピカ：遠近法の再構築』講談社, 1991

細江は、70年代からガウディの写真をとりつづけた写真家。細部に注目し、ガウディ作

品の彫刻的エロスに迫った人です。ある意味でその後の日本のメディアの「お手本」となった注目方法です。一方鈴木は、私が授業で言及した「ガウディを内側から観る」、とりわけ、光の美しさに着目した唯一無二の写真家。そのためにフォト・クビカという独特のテクニックを編み出しました。

2. 「なぜガウディはあれほど異質な存在たりえたのか」という質問について。はたしてガウディはそんなに異質な存在だったのでしょうか。あなたは、同時代のスペインやヨーロッパの建築潮流をどれだけ知っていますか？ガウディを生んだのは（あなたの知らない）時代の潮流かもしれません。調べてみてください。それでもやはりガウディが独自で異質と感ずるなら、どこが、どのように独自で異質か考えてみてください。そのような考察は、レポートや卒論のネタにもなりますし、あなたのスペイン語学習体験を更に豊かなものにします。そして、そんなことをすこしでも調べてから訪れるバルセローナは、その後のあなたの感性の経験の原点になるかもしれません。一生の思い出になることは間違いありません。（石橋）